I am Jazz!（ジャズ・スーパー列伝）

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 60
Victor Feldman【ヴィクター・フェルドマン】
～米国西海岸で活躍した天才マルチ・ミュージシャン～

Photo : Victor Feldman "Seven Steps To Heaven" (Choice)

Profile

1934 年 4 月 7 日、イギリス・ロンドン・エッジウェア生まれ。本名は Victor Stanley Feldman。父親がロンドンでフェルドマン・スウィング・クラブを立ち上げ、10 歳にも満たない子供の頃からプロとして演奏活動を始める。初めてプロとして演奏したのは No.1 リズム・クラブで、兄弟であるクラリネットのロバート、ピアノとアコーディオンのモンティ、ドラムのヴィクターとの“フェルドマン・トリオ”であったと言われており、ヴィクターは音楽的天才児と称された。1944 年に行なわれたグレン・ミラーの AAAF バンドとのコンサートでは「Kid Krupa（名ドラマーのジーン・クルーパーに由来）」の愛称で紹介された。その後、ドラムの師カルロ・クラーマーにヴィブラフォンを勧められ、ラルフ・シャロン六重奏団やロイ・フォックス・バンドでヴィブラフォンを演奏。52 年から 53 年までインドでエディ・キャロルのバンドで活動。54 年から 55 年まで、ロニー・スコットのオーケストラと五重奏団とレコーディングを行う。55 年にロニー・スコットの勧めで米国に移住。ウディ・ハーマン、バディ・デフランコのバンドに参加する他、後にビル・エヴァンス・トリオで活躍するスコット・ラファロとバンドを結成。ベニー・グッドマンやジョージ・シアリング、キャノンボール・アダレイ、マイルス・デイヴィスと共演。57 年よりロサンゼルスを拠点に映画音楽の仕事に従事するようになる。67 年にフランク・ザッパ、70 年代にスティーリー・ダン、ジョニ・ミッチェル、80 年代にはトム・ウェイツ、ジョー・ウォルシュ等、ジャズ以外のアーティスト達とも共演。ピアニスト、ヴィブラフォン奏者、パーカッショニスト、作曲家として活躍。1987 年 5 月 12 日、心筋梗塞のため米国の自宅で息を引き取る。享年 53 歳。

VF's Great Album

自身のリーダーアルバムは勿論、本誌由来のリロイ・ヴィネガーのアルバムをはじめ、他のアーティスト達の数多くのアルバムでも素晴らしいプレイを聴かせてくれています。

ヴィクター・フェルドマンがロンドン時代に残したデビュー当時の音源

ザ・ヤング・ヴィック
ヴィクター・フェルドマン
（SOLID Records：CDSOL-6467）

ヴィクター・フェルドマン (vib, p, ds)、ジョン・ダンクワース (ts)、エディ・トンプソン (p)、スタン・ワトソン (g)、他

1. モップ・モップ 2. レディ・バード 3. クァターニティ 4. ムーンライト・イン・ヴァーモント 5. 風と共に去りぬ 6. エゴ（他、全 15 曲）

ジャケットには 10 代の頃のヴィクターがドラム、ピアノ、ヴィブラフォンをプレイする姿が写っている。「ムーンライト・イン・ヴァーモント」「風と共に去りぬ」「モンキー・ビジネス」「身も心も」等、音楽的天才児と称されたその実力を体感できるロンドン時代に残された若き日のヴィクターのプレイが収められている。この若さでドラム、ピアノ、ヴィブラフォンを弾きこなしていたその才能が末恐ろしい。1948 年、1952 年、1954 年録音。

ヴィクターのヴィブラフォンが冴え渡る1950代の名作

ヴィクター・フェルドマン・オン・ヴァイブス
ヴィクター・フェルドマン
（Mode：MZCS-1112）

ヴィクター・フェルドマン (vib)、フランク・ロソリーノ (tb)、ハロルド・ランド (ts)、カール・パーキンス (p)、リロイ・ヴィネガー (b)、他

1. フィデリアス 2. スクィーズ・ミー 3. スウィート・アンド・ラヴリー 4. ベース・リフレックス 5. チャート・オブ・マイ・ハート（他、全 7 曲）

録音は 1957 年 9 月。本誌由来のリロイ・ヴィネガーの名盤『リロイ・ウォークス！』にも参加したヴィクターだが、両アルバムはほぼ同時期に録音され、本作のベースにはそのリロイ・ヴィネガーが参加している。ピアノのカール・パーキンスも両アルバムに参加しており、いぶし銀のプレイを聴かせている。ヴィクターの美しくブルージーなヴィブラフォンの名演が素晴らしく、フランク・ロソリーノとハロルド・ランドの好演も聴きもの。

ヴィクター・フェルドマンの記念すべき米国デビュー・アルバム

ジ・アライヴァル・オブ・ヴィクター・フェルドマン
ヴィクター・フェルドマン
（オールデイズ・レコード：ODR-6186）

ヴィクター・フェルドマン (vib, p)、スコット・ラファロ (b)、スタン・リーヴィー (ds)

1. 蛇の歯 2. ワルツ 3. チェイシング・シャドウズ 4. フラミンゴ 5. スポージン 6. ビバップ 7. ノー・グレイター・ラヴ（他、全 10 曲）

1955 年にロニー・スコットの勧めで米国に移住したヴィクターの米国でのデビュー・アルバム。当時、ビル・エヴァンス・トリオで活躍していたベースマン、スコット・ラファロと名ドラマーのスタン・リーヴィーとのトリオによる傑作。アルバムのトップを飾る「蛇の歯」からヴィクターのヴァイヴとスコット・ラファロのベースのグルーヴ＆スイング感が最高。ヴィクターの名演と共に後に伝説となるスコット・ラファロの名演も聴ける傑作。

映画出演

ヴィクターの多才ぶりは音楽シーンだけに留まらない。子供の頃には映画にも出演している。1942 年に英国で製作されたマルセル・ヴァーネル監督の白黒コメディ＆ミュージカル映画『キング・アーサー・ワズ・ア・ジェントルマン（原題：King Arthur Was a Gentleman）』では少年ドラマー役。1943 年に英国で製作されたジョン・バクスター監督のコメディ映画『シアター・ロイヤル（原題：Theatre Royal）』ではオーケストラのメンバーとして出演している。どちらの映画もミュージシャン役で、音楽的天才児と称されたその姿を垣間見ることが出来る。

マイルス・デイヴィスからの誘い

ヴィクターの多才ぶりには、あのマイルス・デイヴィスも注目した。マイルスの 1963 年のアルバム『天国への 7 つの階段（Seven Steps to Heaven）』のタイトル・ナンバーはヴィクターが作曲した。そして、マイルスは自分のバンドへの参加をヴィクターに打診した。当時のジャズ・ミュージシャンなら余程の理由がない限り、マイルスからの誘いを断るようなことはしなかったかもしれないが、ヴィクターはツアー・ミュージシャンとしてのキャリアより、スタジオ・ワークでの安定した仕事を選び、あのマイルスの申し出を辞退したと言われている。

Jazz Standards（ジャズ名曲列伝） Vol.33

~ Walkin'【ウォーキン】~

この曲はマイルス・デイヴィスの録音で有名だが、作曲者については諸説存在する。原曲はジーン・アモンズのオリジナル「グレイヴィー」とも言われているが、作曲者としてリチャード・カーペンターという名前も見受けられ、この人物は強面の元会計士で作曲者の版権を不当に取得していたという説もあり、ジミー・マンディが作曲したという説も存在する。謎めいたところがジャズらしくもあるが、名ジャズ・スタンダードとして親しまれている。

★ この名曲が聴けるお薦めのアルバム

マイルス・デイヴィス『ウォーキン』
バド・シャンク『ザ・バド・シャンク・カルテット』
クリフォード・ブラウン『ザ・ビギニング・アンド・ジ・エンド』
リロイ・ヴィネガー『リロイ・ウォークス！』
ピート・ジョリー＆ラルフ・ペーニャ『ザ・デュオ』